

「山田さん、今日バイト終わったら、一緒にご飯食べませんか?」「ごめん、今日はちょっと…」「じゃ、明日はどうですか?」…ブブー。これはダメですね。そう、空気を読まなくちゃいけません。だから私は言います。「あっ、そうですか。じゃあ、また。」

私たちは、日本で毎日毎日、たくさんの消える文末「…」に囲まれています。日本人が言わなかった言葉を補い、「正しい」答えを一瞬で考えて言うのは、本当に難しいです。

日本に来てすぐ、アルバイト不採用の電話で「今回の採用は残念ですが…」と何回も言われました。「日本語が下手だから」理由は分かっています。でも、アルバイトをしたくて、必死で頑張った結果が「残念ながら…」のひと言ではあまりに悔しくて、「はい、と一っつても残念です!」と叫びそうでした。最後まではっきり言わないのは日本人の気遣いだと学校で教わったけれど、私には痛い痛いナイフのようで、日本語にもうんざり、優しい声で申し訳なさそうに最後まではっきり言わない日本人にもうんざりでした。

こんな思いをしたのは、きっと私だけではないでしょう。会話は言葉のキャッチボールだという話をみなさんも聞いたことがありますか?相手からポーンと投げかけられた言葉を受け止めて、またポーンと返す、それが会話だということです。では、最後まで言わない会話はどんなボールなのでしょう?投げられる、姿かたちのない、「何か」を「空気」と日本では呼んでいます。このボールをうまく受け止めて投げ返すのには経験と技術が必要なので、うまくキャッチできなければ痛い思いもします。でも、このボール、「空気」はやっぱり「気遣い」なんだと今の私は納得しています。消える文末は、私に理由を考えて気持ちを整理する自由と余裕を与えてくれているからです。全てを言葉にすることだけが「会話」ではない、日本語は何て懐の大きい言葉なのでしょう。

私は、ある一瞬、ずっと日本語の深さが「分かった」気がします。それは日本語の上達でしょうか。私の成長でしょうか。また一步、日本と近づけたことがとても嬉しくて、少しだけ自慢です。消えた文末に日本人の優しさを見つけました。日本語は、私達留学生だけではなく、日本語を話す全ての人たちを包み込む包容力を持った言語であることに気付きました。その幸せを私は皆さんに伝えたいです。

これからも私達は日本に住む外国人であることには変わりありません。言葉では解決できない壁もあるかもしれません。でも、日本語の持つ空気を感じられるようになった自分たちに自信を持ちましょう。

はい?「自信を持ってと言われても…」という声が聞こえた気がします。あわてる必要はありません。あなたが日本に来ると決めたその心が日本語の空気をつかむはずです。自分の成長にびっくりする日はもうすぐそこです。がんばりましょう。